雨よけ・露地・抑制きゅうり盛夏期の栽培管理

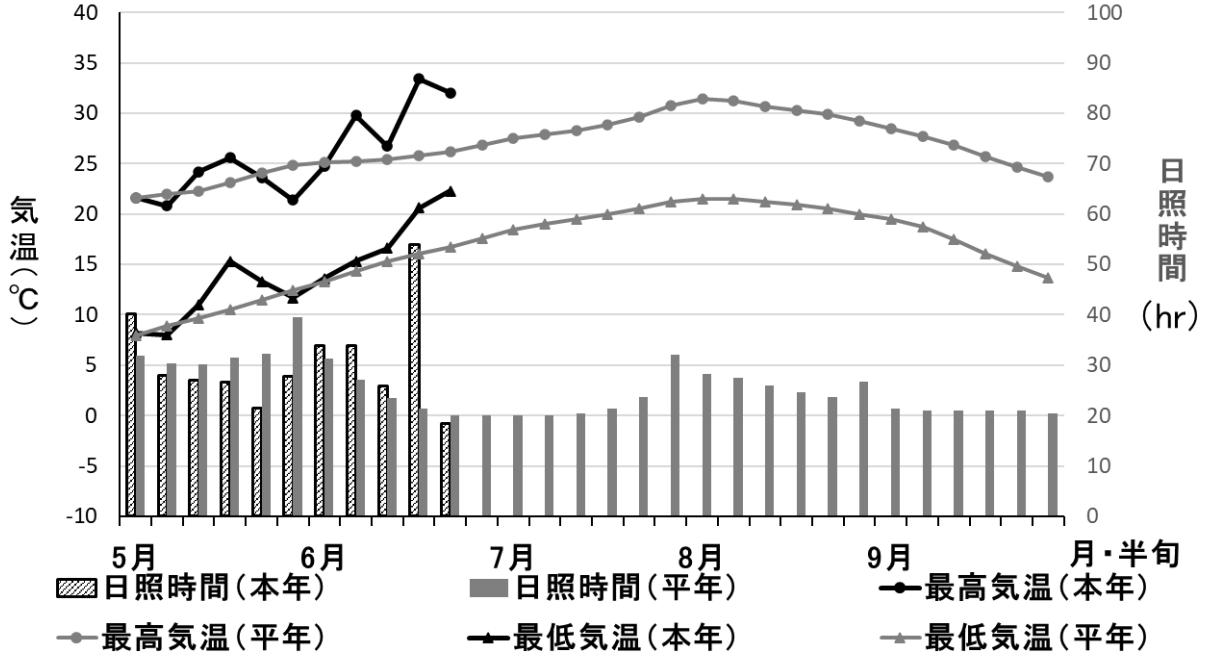
令和７年７月　　日

ＪＡふくしま未来伊達地区本部／伊達農業普及所

梅雨入り　6/14 頃（平年 6/15 頃）
梅雨明け　　（平年 7/28 頃）

1　気象経過と今後の見通し

（1）　気温（最高・最低）及び降水量（観測地点：アメダス梁川）



（2）1か月予報　※仙台管区気象台　令和7年7月10日発表

予報期間	7月5日～8月4日
平均気温	高い見込み
降 水 量	少ない見込み
日照時間	多い見込み

・期間の前半は気温がかなり高い見込み。
・向こう1か月の降水量は少なく、日照時間は多い。

（3）3か月予報　※仙台管区気象台　令和7年6月24日発表

7月	平年に比べ曇りや雨の日が少ないでしょう。
8月	天気は数日の周期で変わるでしょう。
9月	天気は数日の周期で変わり、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

２　栽培管理

作型共通

現在の状況・・(暑さの影響で)

〇流れ果や尻細果の発生
〇葉が薄く、軟弱に伸びている
〇アザミウマ類の多発生
〇生長点が小さく、草勢低下
〇色がマダラな葉がある
〇ウィルス病が発生している

これからの管理のポイント

梅雨とは思えないくらい高温で、着果負担の影響もあり草勢が低下しています。
お盆以降の収穫に結びつけるよう『混んでるところを整理する』管理を徹底しましょう。

①根の動きを弱らせない→着果負担をなくす・発根促進剤の利用
②光合成を助け・維持する→Mg（苦土）の葉面散布・摘葉と整枝で光を通す
③べと病・炭疽病・つる枯病・ハダニ類の防除を徹底→予防と治療を徹底する

（１）根張りの回復

着果負担も加わって根の動きが停滞しやすくなっています。盛夏期にむけて根量を増加させておきましょう。

ア　かん水

〇マルチ内の土壌水分を確認しながら、１回当たりの時間を短くして回数を多く、こまめなかん水を行う。(雨よけ栽培は、夜間のハウス内湿度が上がらない時間帯までとする。)
〇主枝がアーチ肩あたりまで伸びてきたら、ベット肩も含め積極的にかん水する。蒸散を促すことで空中湿度が確保される。
〇主枝摘芯までは株元かん水を行い、不定根の発生促進を心がける。

イ　酸素の供給

①　かん注（かん注機の使用）

根の近くに肥料、水分だけでなく空気も送り込まれるので、発根が促進され草勢回復効果が高い（ただし、圧力が高すぎると根を切るので注意）。

使用資材と使用量
アミノキッポ　5kg/10a(300 倍)　＋　新チャンス液 5kg/10a(300 倍)

②　酸素供給剤の施用

過湿状態で根が弱っている時に施用することで、根の回復を早める効果がある。

資材名	使用方法
ネハリエース	20kg/10a を通路に散布
M･O･X	100 倍以上に希釈 1,000 ㍑以上/10a をベッド又は通路にかん水

③　マルチを肩部分まで剥がす
マルチを軽く剥がし、息抜きするだけでも効果が期待できる。

ウ　発根促進と光合成能力向上資材の施用

〇ポリリン酸系・亜りん酸系の発根促進剤＋アミノ酸系の肥料、アミノ酸系の肥料＋苦土又は鉄含有肥料を効果的に組み合わせる。

葉色がまだら（同化不足）になっている、着果負担で草勢が低下しているとき
アミノメリット青(7-4-3)500 倍＋グリーンセーフプラス 1,000 倍(葉面散布)
ホップアップ(1-6-6)300 倍＋グリーンセーフプラス 1,000 倍(葉面散布) ※ホップアップは果形が悪い時も効果期待できる。
トミーネクサスグリーン(6-8-8)、トミーエボリューション(8-5-8)など(かん水) ※1回当たり窒素成分は 1kg 程度とし、収穫見込み量に応じて数日間隔で施肥。
葉色が薄い又はまだらになっている、軟弱に生育しているとき
アミノメリット黄(3-5-5)500 倍＋鉄力あくあ F14　5,000 倍(葉面散布) ※鉄力あくあ F14 は7～10日間隔での使用。

【ポリリン酸系】アミノメリット、ホップアップ、アミノキッポなど

まだら葉→

（２）地上部の管理

今年は雨よけ・露地とも低節位の節間が短い傾向です。ベッドから高さ４０cm までは風通しを良くするため、子づる・孫づる、葉の整理をしましょう。８月上旬の積極的な整枝で秋以降の長期収穫が可能になります。

作業	方　　法
摘葉	・過繁茂にならないように、積極的な摘葉を行う。特に低節位と上段。 ※アーチの内側に光が入るようにすることが大切。外側からも整理する。
整枝	・曇雨天時は傷口が乾きにくいので、晴れ間や午前中に作業する。 ・生育期間を通して、常に生長点を３本以上残すようなイメージで管理する。 ・中段から上段は子づる・孫づるで混んでしまうので随時整枝する。
摘果	・積極的な摘果はそれだけで『追肥』をやったのと同じくらいの効果がある。 不良果は小さいうちに摘果して株の負担を軽くする。

追肥	【粒状肥料】 収穫初期は 2 週間に 1 回、収穫盛期からは 1 週間に 1 回を目安として、窒素成分 2～3kg/10a 施用。 【液体肥料】お盆以降は液肥中心で。 3～5 日間隔。窒素成分 0.5～1kg/10a を 500 倍以上で施用。 ※トミー液肥ブラックであれば、10kg/10a で窒素成分量 1kg/10a となる。

※根の傷みが想定されるときは、（１）の葉面散布も併せて行う。

※その他、発根促進剤（アミハート、新チャンス液など）と併せて施用する。

。。＊　果実で判断する追肥のタイミング　＊。。

曲がり果のうちに追肥する。

尻細果、尻太果、流れ果は
『もう。無理!早くご飯ちょうだい』
のサイン。

（３）芯やけ・葉やけ・しおれ対策　～天気の周期変化に要注意～

曇天の合間に周期的に強日射があり、しおれが発生しやすい天候になっています。

【芯やけ・葉やけ対策】

葉からの水分蒸散を抑制する蒸散抑制剤（プロテックα）、保水力向上資材（アイスバリア）を予防散布するか、晴天日が予想される当日の朝までに葉面散布する。

●予防に：プロテックα 1,000 倍、アイスバリア 500 倍

●急な対応（当日早朝まで）に：プロテックα　100～200 倍、アイスバリア 300 倍

【しおれ対策】

曇雨天日が続くと、晴れ間の強い日差しに耐えられずしおれが発生する。適宜遮光資材を活用し、遮光資材がない場合は葉水や葉面散布等で対応する。

◎遮光資材の活用をおすすめします。

（４）病害虫防除　～べと病・炭疽病・つる枯病・ハダニ類に注意～

日中の高温が続いています。薬害の発生に注意してください。

〇べと病　：下段でべと病が発生している場合は、葉かきで対応する。
防除を行う時は、葉裏にしっかりと農薬がかかるように散布する

〇炭疽病　：多湿条件をつくらない。雨よけでは換気をよくする。露地では通路に水たまりを作らない。防除を行う時は、雨前の散布を徹底する。葉面被膜剤（プロテックα）を活用する。

〇つる枯病：株元の通風を良くする。葉かきをしてムレをなくす。防除を行う時は、株元への散布と雨前の散布を徹底する。

<u>〇急性萎ちょう症</u>：晴天日に『しおれている』株がある場合、JA 又は普及所に連絡ください。翌年の対策のため、病害の有無を特定しておきましょう!
今年は露地栽培において、ウイルス症に感染した葉が多く確認できます。

【薬害の出やすい条件（例）】
〇薬害の出やすい農薬：アミスター20 フロアブル、カンタスドライフロアブル、ベフドー水和剤など
〇条件：高温時、日没前、日照不足、農薬の連続散布、混用、機能性展着剤の加用等

●農薬の使用にあたっては、JAの令和７年度版野菜病害虫防除基準を参照し、補助簿を活用して適正に使用してください。

（５）　各作型別ポイント

雨よけ栽培

ハウス内の高温・乾燥を防止して、芯やけ・葉やけにならないように管理する。
①ハウス内に風が循環するように換気をする。
②少量多回数のかん水によりしおれを防止するとともに空中湿度を確保する。
③晴天日は遮光資材を有効に活用する。遮光資材がない場合は、葉面に散水するか蒸散抑制剤を効果的に使用してしおれを防止する。
④**過繁茂にならないよう積極的に上段・中段の整枝と葉かきを行い、追肥を遅れずに行う。**
⑤べと病・炭疽病・褐斑病・ハダニ類の防除を徹底する。

露地栽培

マルチ内の水分状態を確認し、ベット肩も乾燥させないようにする。根張りと光合成を意識した管理を！
①ベッド上 40cm までの主枝果実の摘果を徹底する。**節間が短いので、下段の枝や葉の整理を積極的に行う。**
②土壌水分が確保できる場合は、積極的に粒状の肥料を施肥する。
③生育が停滞している時は酸素供給剤と発根促進剤を施用する。
④下段が短節間でかつ中段以降の側枝の発生が悪いときは、強い放任枝を確保する。
⑤アブラムシ類、アザミウマ類の防除と、雨前の病害予防散布を徹底する。

抑制栽培

８月お盆頃までは、ハウス内が高温にならないように、**換気・遮光**を行う。遮光資材や蒸散抑制資材等を活用し、芯やけ・葉やけの防止に努める。
①ハウス内の土壌が乾燥している場合、**ベッド内の水分を十分に確保して定植する。**
②本葉８枚までの**株元かん水を徹底する**。主枝摘芯までは株元かん水を実施する。
③定植後、アザミウマ類、アブラムシ類、ハダニ類の防除を徹底する。
※定植時の粒剤処理を忘れずに！

抑制きゅうり

●病気の葉、古い葉を中心に積極的に摘葉する。

●目の高さを目安に摘芯する。

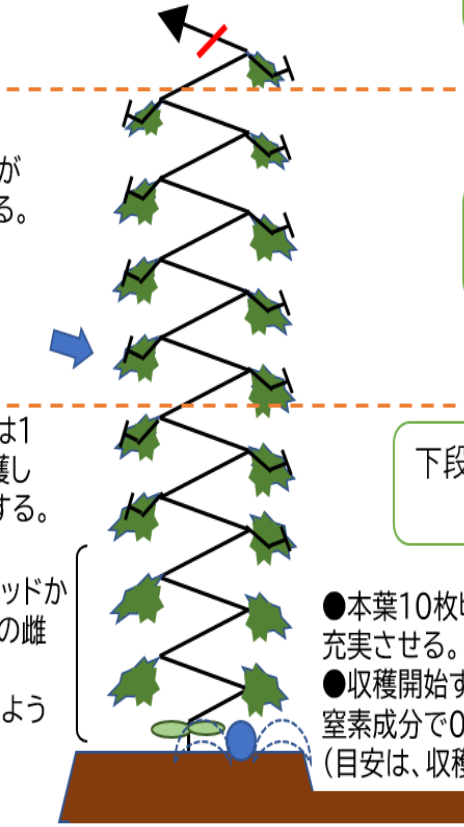
上段（アーチの天井）は、混ませない。
～イメージは、チラチラ空が見える～

●原則、側枝は1節止め。
気温が高いため、側枝の発生が良い。遅れないように摘芯する。

中段は、側枝が混まないように配置する。
～イメージは、この範囲で収穫する～

●下段は孫つるも含め、側枝は1節止め。下節位の側枝は、収穫したら切り戻して風通しを良くする。

下段は、収穫したら側枝（孫つる）は切り戻す。
～イメージは、主枝の枝だけの空間～



●本葉10枚位になったら、ベッドから30cmの範囲の側枝・主枝の雌花(果実)は取り除く。
●側枝が垂れ下がってこないようしっかり誘引する。

●本葉10枚頃までは株元かん水をしっかり行い、根張りを充実させる。
●収穫開始する予定の雌花が開花頃から追肥を始める。
窒素成分で0.5～1kg/10a。収穫量を考慮して追肥をする
(目安は、収穫量1トンに対し、窒素成分で4.3kg/10a)。

●適宜、休憩と水分補給をして、熱中症対策をしましょう。
●農薬は、最新の農薬登録情報を確認して使用しましょう。
●農地中間管理事業を活用し、地域農業を守りましょう。
●収入保険制度・農業共済制度等を活用し、経営の安定を図りましょう。